

英語ヒエラルキー グローバル人材教育を受けた学生はなぜ不安なのか

佐々木 テレサ

外国語を話しているとき、話題の着地点を見失ったり、自分の話題がどこにいるかわからなくなったりしたことはないだろうか。筆者はこれが日本語で起こる。筆者は自分の日本語が不安だ。しかし、日本生まれ日本育ちの日本語母語話者である。

筆者が卒業した国際教養学部は EMI プログラムを実施している学部であった。筆者は学部生の 4 年間で英語で科目を教わって過ごした。この 4 年間の英語漬けにされた環境がどうやら筆者の日本語への意識に影響したようだ。そしてこの日本語への負の意識は私だけが抱えているものではなく、同じ学部を卒業した友人や、他の大学で EMI 実施学部を卒業した友人も共通して持っている感情のようであった。

筆者は EMI 実施学部を卒業した人は日本語の不安を持つのではないかと考えるようになった。

シンポジウムでご紹介した著書、「英語ヒエラルキー グローバル人材教育を受けた学生はなぜ不安なのか」は、筆者の実体験がもととなっている。

本書では卒業生へのインタビューをもとに、グローバル人材育成教育の内実を示し、EMI の実施に一石を投じている。急速なグローバル化に対応すべく、政府は高等教育で EMI プログラムの設置を進めている。しかし、この EMI 教育を受け留学を経て卒業した学生の中に、母語である日本語の不安を覚える人が現れている。英語能力による明確なヒエラルキーの中で、日本語だけでなく様々なことに自信を失っている。またグローバル人材として就職した先では、旧来の企業風土への違和感と幻滅も覚えているようだ。

日本語の不安に対して EMI 実施学部での経験は大きく影響しているだろう。EMI 実施学部には、もともと英語が得意だった高校生たちが入学する。しかし、入学後は欧米文化へのカルチャーショック、明確な言語ヒエラルキーを目の当たりにする。劣等感を強く感じながらも英語至上主義の実力社会で生き残っていくには、日本語が消えるくらい英語に没頭しなければならないのだ。

また、EMI 実施学部の卒業生には明確なグローバル人材としての自覚があった。彼らが捉えるグローバル人材の姿は、英語を使えるかつ、思考や態度においても柔軟性・多様性を備えた人物である。しかし、日本社会の捉えるグローバル人材の姿は、英語能力のみが重要視されているようで、その意識の違いにより、EMI 実施学部の卒業生は、自身をどう位置付けるか困惑している。

日本語母語話者の日本語に関する研究はまだまだ少なく、今後も継続して調査を続ける必要があるだろう。

筆者は日本語が不安と言いながら、タイトルにも「英語」の文言を使って、内容では英語の不安についても言及している。これについては、英語と日本語、それぞれの言語活動

は互いに密接に関わり合っていると筆者は思う。人それぞれによって多面的に様々な不安、葛藤があることを多くの人に知ってもらえることを願う。